

大学入試センター試験および国公立大二次・私大

大学入試 分析と対策

英語

2016
平成28年度

学校法人 河合塾
英語科講師 江本 祐一

启林館

この冊子の内容は次のURLからもアクセスできます
<http://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/tea/kou/eigo>

1 センター試験

(1) 筆記試験

2016 年度の筆記試験は、2015 年度同様、その前年の追試の出題を踏襲したものとなっており、第5問が物語文の読解に変わる、という大きな出題内容の変更があった。2015 年度の例から、ほとんどの受験生が 2015 年度の追試に目を通してはいたはずで、受験生の戸惑いは 2015 年度ほどではなかったと思われる。また、2014 年度まで第3問Aで出題され、2015 年度には第5問、第6問で 1 題ずつ出題されていた語句の意味類推問題は、2016 年度は出題がなかった。そのほかは 2015 年度と同じ出題形式で、2015 年度に新出の問題形式もそのまま 2016 年度に踏襲された。総語数は、2015 年度の 4,385 語に対して 4,288 語で約 100 語減少している。平均点は 112.43 点で、2015 年度の 116.17 点から若干下がっている(2014 年度は 118.87 点)。配点は 2015 年度と同様で、音声に関する問題の配点が 14 点、文法・語法系の問題の配点が 44 点、残りの 142 点が読解系の問題で、読解力重視の傾向に変化はない。

(2) 設問別分析

第1問

2015 年度同様に、A が発音問題、B が音節分けのないアクセント問題で、A・Bともほかの 3 つと異なるものを選ぶ問題。A では *wounded* の音が問われているのが特徴的。いわゆるカタカナ語と言えるものの出題は、*tiger* / *church* / *curtain* / *charity* 程度で、例年になく少ない印象であるが、出題されている単語はいずれも読解問題でよく見かける単語であるし、*demonstrate* / *politics* などはアクセント問題の頻出語である。カタカナ語も含めて、日頃から正しい発音、アクセントを心がけておくことが必要。

第2問

A では、2014 年度に初めて出題された 2 か所の空所補充の問題が、引き続き出題されている。語彙にせよ、文法や語法にせよ、斬新な問題が出題される印象の第2問 A であるが、2015 年度同様に 2016 年度も、普通の文法問題という印象が強い。特徴的な 2 題を取り上げる。

第2問A 問2

9 Tokyo has a relatively small land area, it has a huge population.

- ① Although ② But
- ③ Despite ④ However

第2問A 問9

Wood (A) be used as the main fuel, but nowadays fossil fuels (B) widely.

- ① A: used to B: are used
- ② A: used to B: have been used
- ③ A: was used to B: are used
- ④ A: was used to B: have been used

第2問A 問10

(A) so considerate (B) him to come and see his grandmother in the hospital every day.

- ① A: He is B: for
- ② A: He is B: of
- ③ A: It is B: for
- ④ A: It is B: of

問2は、従位接続詞の although、等位接続詞の but、前置詞の despite、副詞の however の区別を問う問題。単に意味が分かるというだけではなく、品詞を含めて、各語の使い方が分かっているかが問われている。問9は過去の習慣を表す used to do と受動態の be used to do 「…するために使われる」の区別と時制を問う問題。be used to doing 「…するのに慣れている」との混同も考えられ、正確な知識が問われている。問10 では It is 形容詞 of 人 to do と It is 形容詞 for 人 to do の区別が問われている。いずれも文法・語法の問題集ではよく見かける問題ではあるが、2015 年度同様に、文法・語法について細かい部分についての正確な知識が求められている。

語句整序問題は、2014 年度に統いて 3 問とも 6 つの選択肢で対話文形式の出題。発話者の名前が入っている点も含めて、出題形式は 2015 年度と同様である。出題内容は、tell O₁ O₂, let O do, come to do など語法の知識を問うことに加えて、問1 では S be wondering if S' could do という丁寧な依頼表現が問われ、問3 では the need to manage my time という形を作るためには、状況把握力も問われており、対話形式での出題の意義が感じられる出題となっている。

C では 2014 年度の追試で出題され、2015 年度の本試で出題された応答文完成問題が引き続き出題されている。2015 年度は文法的な知識を問う性質が強く、正確な表現の知識を正面から問う問題という印象であったが、2016 年度は文法的にも意味的にも成立しそうな組み合わせが複数あり、文法・語法の知識だけでなく、対話の流れを意識しなければならない問題となっている。

第3問

Aの対話文完成問題は、2015年度では知識重視の出題であったのに対し、2016年度では状況把握力を問う出題となっている。

Bの不要文選択問題は、2014年度同様、選択肢となっている文が連続していないものも出題された（2015年度はすべて連続していた）。2015年度は問3でmost Japanese TV shows started and ended exactly on the hourの意味を正しく理解しなければ、解答が得られないといった問題が出題され、正答率が低かった。それに対して2016年度は、問1では選択肢の英文の直前がStudents are learning scientific principles through actual experienceで、その具体例が②③④に述べられていることから、①が余計な文と分かり、問2では②と③の間の文に含まれるthis approachが①にあることから、②が余計な文と分かり、問3では選択肢の直前の文がThere are some significant differences...であるのに対し、①は共通点を述べた文であることから、①が余計な文と分かる、といった出題で、この問題に苦手意識を持っていた受験生も比較的解答しやすかったのではないだろうか。

Cの発言の主旨選択問題では「異文化理解」をテーマにしたある大学での授業でのやりとりの一部からの出題。2015年度と違う点は、34は直前のprofessorの発言だけからは判断がつかない選択肢が含まれ、Student 3とprofessorのやりとり全体を要約した選択肢を選ぶ必要があることで、やや解答しづらい問題であった。

第4問

Aでは「アメリカのオレンジの生産高と輸入量」を論じた英文と2つのグラフを用いた問題が出題された。グラフ中の項目を埋める問題、部分の理解を問う問題、メッセージ全体のテーマを問う問題に加えて、2014年度から出題されている最終パラグラフに続くパラグラフのテーマを答える問題も引き続き出題された。アメリカのオレンジの生産高と輸入量が中心的なテーマであるが、オレンジの種類の区別が途中で述べられるなど、扱っている情報が多岐にわたり、2015年度よりも解答しづらかったと思われる。

Bでは、2014年度以降ウェブサイトを用いた問題が出題されている。2015年度と同程度の長い設問文が問2で出題されているが、求められる計算も複雑なものでなく、紛らわしい選択肢もいたために、比較的解きやすい問題であった。

第5問

2015年度の追試と同様に、物語文の読解問題が出題された。本試での物語文の読解問題は2007年度以来の出題である。語数は過去最高であった2015年度からさらに微増し、877語であった。特徴的な点としては、第1パラグラフと最終パラグラフが現在時制で、Uncle Johnが料理人になった経緯を述べた途中のパラグラフは過去時制になっていること、問1では、英文の語り手であるIがMikeであることは最終パラグラフのUncle Johnの発話を読むまで分からぬこと、また、問2では、第2パラグラフ全体の内容から解答を導き出す必要があること、そして、問5は物語全体の内容をまとめるような主旨の出題である、といったことが挙げられる。

第6問

「オペラの抱える問題」について論じた論説文からの出題。2015年度に1問出題されていた語句の意味類推問題はなくなり、代わってWhat about A?の本文の中での意味を具体的に選ぶ問題が出題された。基本的にはパラグラフ対応の内容一致問題であるが、2015年度に出題されたthe author's main messageを問う問題と同主旨の問題として、2016年度は本文全体のタイトルを問う問題が出題された。また、2015年度にはBの選択肢がパラグラフの内容だけでなく、パラグラフのタイトルがついた選択肢であったが、2016年度はタイトルがなくなった。総語数は2015年度の854語から、758語に減っている。

1つのパラグラフ内で文と文のつながりを考えながら読み進め（第3問B）、1つのパラグラフが終わるごとにその内容を確認し（第3問C）、次のパラグラフの内容をある程度まで予測し（第4問Aの問4）、さらには1つのメッセージ内ではパラグラフとパラグラフのつながりを考えながら読み進める（第6問B）という、いわば当たり前の読み方が求められ、またそうすることで高得点が得られることが、センター試験の読解問題の特徴である。このような読み方をすることで、全体の文意がとれるため、細部に対する理解も深まり、未知の表現が出てきても、立ち往生することなく読み進めることができる。

例年、本稿で指摘している通り、読解力の強化には、文法的知識と語彙力を高めるとともに、論説文をはじめ、エッセイや物語文など、様々なタイプの英文を読むことが必要である。その際、よく分からぬ部分があつても、少なくとも1つの段落は最後まで読み切り、全体の内容を把握する訓練が効果的であろう。そのため

は、比較的やさしめの入試問題でパラグラフごとに内容一致問題がついたものなどを利用することが考えられる。また、読解系の授業の予習の際は、あらかじめ生徒に制限時間を告げておき、まずは辞書なしで英文を読み、設問に答えさせる練習、つまり「予習は模擬試験だ」という姿勢での練習も効果的であろう。私自身の場合、生徒には、「予習段階で辞書を使う際は調べたい単語の半分だけを調べ、調べた単語は絶対にその場で覚えること。残りは文脈から推測すること」という指導をしている。外国語である以上、未知の単語があるのは当然のことと、それにいかに対応するかという訓練をさせることが必要である。また、一度読んだ英文を繰り返して読む、という訓練を嫌がる生徒もいるが、既習英文を繰り返して読むことは、読解のスピードを上げることとともに、語彙力の定着にも効果的である。その意味で、授業で扱った英文や自分が問題集等で読んだ英文は繰り返して読むように指導すべきであろう。これらはセンター試験に限らず、国公立大の二次試験や私立大の試験対策にも有益なはずであるし、たとえ入試で英語が必要なのはセンター試験だけ、というような生徒でも総合的な力が高まるのではないだろうか。

(3) リスニング試験

第3問Bで、従来のグラフや表を完成させる問題から、質問文に答える形式の出題に変わった。また、従来は短めの英文が3題出題されていた第4問Aが、長めの英文を1つ聞いて3つの設問に答える従来の第4問Bの問題に変わり、第4問Bには3人の人物が登場する長めの対話文が出題されるなど、センター試験でリスニング問題が出題されるようになって以来初めて、大きな変更があった。読み上げられた語数は、2015年度は1,123語に対し1,129語でほぼ同じであるが、設問と選択肢の語数は、2015年度の462語に対して576語で、文字情報の読み取りの負担が増えている。平均点は、7割を超えた2015年度の35.39点に対して、30.81点に下がった。特に、新しい出題内容である第4問Bでは、3人の意見の類似点と相違点を整理して聞く必要があり、正解を導くのが難しかったと思われる。

例年本稿で指摘している通り、リスニングテストでは、落ち着いて最後まで聞く姿勢が必要で、平常心で試験に臨めるレベルにまで聞き取りの力を高めておかなければならぬ。対策としては、①文字を見ないで繰り返し聞き、かなりの部分が聞き取れるようになるまで文字を見ない。②問題に答える。③文字を見て、聞き取った

内容を確かめる。④書き取る、という一連の練習を積むのが望ましい。①でいう「かなりの部分が聞き取れるようになるまで」というのは、個人的には「9割方聞き取れるようになるまで」と考えている。やはり未知の単語や表現は聞き取ることができないであろうから、そのようなものを除いた部分すべてが聞き取れるまで、ということである。また、④の書き取りまではセンター試験では必要ないという意見もあるだろうが、書き取ることによって、聞き取りに対する自信が深まること、語彙力や文法力の向上（聞き取れなかった部分を文法の知識で修復する）や、正しい綴りの定着につながるなど、その効果は大きいと思う。

選択肢の英文をあらかじめ読んでおくことなど、リスニング問題には読解力が影響を及ぼす要素も大きい。2016年度は、選択肢の英文量が増えたことも平均点が下がった原因の1つと考えられる。そもそも読み上げられた速度で英語を理解できなければ、対話に続く表現を決めることもできないし、聞き取った英語を言い換えた選択肢が正解となる問題には対応できない。正しく速く読むということは、リスニング問題で高得点を取るためにも必要である。そのためには、筆記試験のところで述べた既習英文の反復読みが効果的である。また、語彙の知識がなければ、せっかく英語が聞き取れても正解を得られないという結果になりかねない。

2 国公立二次試験

(1) 概観

まずは、2016年度の主要な国公立大学で出題形式や内容について目についたものを取り上げる。

東京大学：毎年のように出題形式に変化がみられるが、2016年度は第2問(B)が、第2段落の英文から導かれる結論を第3段落として書く問題に変わった（2015年度は相反する2つのことわざの説明問題）。

京都大学：2015年度に統いて出題形式に変化があった。

読解問題で下線部の内容説明（2015年度よりも本格的なもの）と補充問題が出題され、英作文では1999年度の後期試験以来の自由英作文問題が出題された。

東北大学：2015年度に全体の記述量が減り客観問題が増えたのに対し、2016年度は全体の記述量が増え、客観問題が減り、全体の難度は増した。新傾向の問題として、文整序問題が出題された。ディベートを読み、どちらかの立場で自分の意見を述べる技能統合を意識

した問題は、2016年度も出題されていた。

一橋大学：3つのテーマから1つ選んで英文を書く形式の自由英作文で、2015年度にはテーマの1つに絵画の描写が出されたのに対し、2016年度は3つのテーマが全て写真や絵画になった。求められる語数は120～150語から100～130語に減った。

名古屋大学：読解問題で1つの段落を構成する4文の整序問題が出題された。2015年度に出題された意見表明型の自由英作文はなくなり、本文の関連する内容を英文で書く自由英作文が出題された。対話文を素材としている点は2015年度と同じ。

大阪大学：例年通りの出題であるが、IIで2015年度に外国語学部以外の問題から消えた和訳問題が2016年度は3題出題された。IIの英文自体、分量は増しているが内容的には読みやすい英文になっている。与えられたテーマについて書く自由英作文は従来通りの出題。

神戸大学：英作文問題が、2015年度の和文英訳と自由英作文の融合問題から、対話文の補充形式の自由英作文と地図を用いた状況説明の自由英作文の出題となった。全体の難度は増している。

九州大学：従来は独立した問題として出題されていた意見表明型の自由英作文が、長文読解問題の設問の1つとして出題された。そのため大問数は4つに減ったが、逆に総語数は約350語増えている。

(2) 読解問題

従来の形式を踏襲したものが多く、特に新学習指導要領を踏まえた出題が増えたわけではない（従来から新学習指導要領を先取りした出題をしてきた大学も多く、その傾向は踏襲されている）が、設問文を全て英語にした出題や英問英答形式の出題が増えたことは、2016年度の出題の特徴と言えるだろう。新学習指導要領の1つの柱として、「読む・聞く・書く・話すの4技能の統合」が挙げられる。大学入試の制約上、「読む・書く技能の統合」が出題の中心となるために、英問英答形式の出題が増えたと言える。

例として、金沢大学の読解問題を取り上げる。金沢大学は、2016年度に出題形式が最も大きく変わった大学の1つで、以下に示すように、設問文が全て英語になり、設問も英問英答形式になり、解答用紙には英語以外を記述する部分がなくなった。英作文についても劇的に変化している。紙面の都合上、問題文自体は省略し、設問の一部のみを掲載する。

II Read the following passage and answer the questions in English.

<本文省略>

Question 2: The title of the passage says "Chimpanzees can 'cook'." Do you think it is true? Explain your reason based on this passage in 20-30 English words.

Question 3: Based on this passage, explain why scientists study chimpanzees. Answer in 20-30 English words.

Question 2では本文で書かれている内容について自分の意見を求められ、Question 3では本文の内容説明が求められている。ちなみに、自分の意見を求める問題はIでも出題されている。

同様の「読む・書く技能の統合」を意識した問題は、北海道大学、旭川医科大学、小樽商科大学、札幌医科大学、東北大学、宮城教育大学、東京大学、東京医科歯科大学、東京農工大学、筑波大学、名古屋大学、浜松医科大学、静岡大学、京都府立大学、山口大学、九州大学、熊本大学などでも出題されている。

金沢大学同様に、解答用紙に英語以外は書かせないというスタンスの出題の大学として、小樽商科大学がある。先に挙げた金沢大学では、内容一致問題はTrue/Falseを解答用紙に書き込むという形であったのに対して、小樽商科大学の内容一致問題は、本文に一致しない選択肢は正しい表現に訂正させる、という出題をするなど、非常に特徴的な出題が目立つ。次の問題は2016年度新しく出題された形式のものではないが、文部科学省が重視する「思考力」を測る問題の一例である。

問題1 Read the text and write QUESTIONS in English for the answers below.

Glasgow has the fourth oldest university in Britain (after Oxford, Cambridge and St. Andrews) and was once the second city of the British Empire and the fourth largest in Europe. In the 19th century it produced 50 % of all Britain's ships. Like other industrial centres such as Newcastle, Manchester and Liverpool, however, it suffered from wartime damage and postwar economic decline.

～以下省略～

Answers

(1) 50%.

～以下省略～

本文の第2文 (In the 19th century ...) から、What

percentage of all Britain's ships did Glasgow produced in the 19th century? といった疑問文を作ることになる。「思考力」を問う問題として特筆すべきものであろう。

最後に、合教科・合科目的な問題として、名古屋工業大学の問題を挙げる。この出題は 2016 年度に始まったものではないが、数学と英語の合教科を意識した出題である。4 題の出題のうちの 1 題を全文掲載する。

IV Answer the questions below.

1 When Takeshi was 18 years old, as his part-time job, he delivered newspapers to homes every morning. He worked hard because he wanted to buy a clarinet. He started the job on June 1. He got 100 newspapers to deliver and each delivery paid him five yen. In addition, he was told that he would get an extra five thousand yen per month if he could deliver the newspapers every morning. Takeshi was able to do the delivery work every morning in June, but in July he could not work for eleven days because of his exams. Instead, he doubled the number of newspapers in August and managed to deliver every morning. Takeshi put all this money into a bottle, and on September 1 he took the money to a musical instrument shop. The owner of the shop counted the money, and sold him a clarinet that cost ¥50,000 more than the total of Takeshi's money from his part-time job. Actually, this ¥50,000 was a present from Takeshi's mother!

Question: How much did the clarinet cost?

数学（算数？）の問題としては難しいものではないが、合教科の問題として注目に値する。また、芝浦工業大学にも同種の出題が見られる。

（3）表現力

従来と異なる出題を行った大学が増えた。とりわけ、先に読解力の項でも述べた「読む・書く技能の統合」を意識した問題が増えたこと、写真やグラフ、地図などのビジュアル的な要素を取り入れた出題が増えたこと（小樽商科大学、東京大学、一橋大学、神戸大学、金沢大学、山口大学など）、対話形式の出題が増えたこと（小樽商科大学、千葉大学、宮城教育大学、愛知教育大学、京都大学、山口大学など）がその特徴である。

ビジュアル型の出題例として、ここでも金沢大学の問題を取り上げる。従来の会話文を補う問題と和文英訳に代わって、次のような問題が出題された。

III Write a story in English about the picture below in 80-120 words. The story should be creative and include all the following points:

- Who the people are, and their thoughts and feelings (who are the characters and what are they thinking and feeling?)
- The current situation (what is happening in the picture?)
- The past events (what happened before the event in the picture?)
- The future outcome (what will happen after the event in the picture?)



(Illustration by Ivan Lapper in Robert O'Neill, *Interaction*. p 23. Longman [1976])

人物の感情、現状、過去に起ったこと、今後起ることのすべてを盛り込んで、ストーリーを書かせる問題である。受験生の英語表現力に加えて、創作力も含めた発信力を問う問題として注目に値する。

対話形式の出題例として、京都大学の問題を取り上げる。従来は本格的な和文英訳 2 題が出題されていたが、2015 年度は対話形式の和文英訳が、2016 年度は対話形式の自由英作文が出題された。

IV 「積ん読」という言葉をめぐる次の会話を読んで、空欄(1)(2)に入る適当な応答を、解答欄におさまるように英語で書きなさい。

Dolly: I see that you have so many books! You must be an avid reader.

Ken: Well, actually, I haven't read them. They are piling up in my room and just collecting dust. This is called *tsundoku*.

Dolly: Really? I've never heard of *tsundoku*. Can you tell me more about it?

Ken: (1) _____

Dolly: I can understand. What are your thoughts on *tsundoku*?

Ken: (2) _____

この出題形式が定着するとは考えがたいが、以前の出題形式に戻るととも考えにくい。京都大学の受験生も和文

英訳の対策だけで十分とは言えなくなったと言える。

3 私立大学

私立大学では空所補充、下線部の言い換え、内容一致などが出題の中心である。空所補充や言い換え問題では、単語や熟語等の語彙的知識をそのまま問う場合と、文意を把握した上で未知の（あるいは難解な）語句の意味を推測する必要がある場合があるので、基本的な語彙力の強化と英文内容の理解力を高めておく必要があるという点では、国公立大学の場合と違いはない。国公立・私立を問わず、読解問題の長文化が進んでいるが、客観問題中心の私立大の問題は1題の英文量が多いだけでなく問題数が多いのも特徴で、限られた時間で設間に答えるトレーニングが絶対に不可欠である。

青山学院大学の全学部日程に特徴的出題が見られた。

IV Part II

Dialog 1: 中華料理店での会話

John: Could you pass me the egg rolls, please?

[David is looking at his smart phone and not paying attention to John at all.]

John: HEY, if you wouldn't mind, would you PLEASE pass me the egg rolls.

[While David is still staring at his smart phone's screen and not looking up, John reaches over to the other side of the table and gets the egg rolls himself.]

John: Thank you VERY much!

David: Huh?

36. When John says "Thank you VERY much!" it is likely that he feels ____.

- ① relaxed
- ② annoyed
- ③ too full
- ④ clumsy

VERYという大文字表記の理由が問われており、コミュニケーション能力を測る特徴的な設問と言える。

私立大学の表現力を問う問題は語句整序問題が中心であるが、200語程度の英文の要旨を1文で表す問題（早稲田大学 文学部・文化構想学部）、与えられたテーマについて意見を述べる問題（早稲田大学 国際教養学部・法学部・政治経済学部／慶應義塾大学 医学部・経済学部）なども出題されている。

江本 祐一（えもと・ゆういち）

東大、京大、医進の授業を主に担当。長文読解、京大英文解釈、京大英作文、医進英語などのテキスト、京大即応オープンの作成メンバー。

著書：「英語暗唱文ターゲット450」（旺文社）、「入試英単語の王道」（河合出版・共著）、「センターはこれだけ」（文英堂・共著）など。

新興 啓林館

URL <http://www.shinko-keirin.co.jp/>

本社	〒 543-0052	大阪市天王寺区大道4丁目3番25号	TEL(06)6779-1531	FAX(06)6779-5011
東京支社	〒 113-0023	東京都文京区向丘2丁目3番10号	TEL(03)3814-2151	FAX(03)3814-2159
札幌支社	〒 003-0005	札幌市白石区東札幌5条2丁目6番1号	TEL(011)842-8595	FAX(011)842-8594
東海支社	〒 461-0004	名古屋市東区葵1丁目4番34号双栄ビル2階	TEL(052)935-2585	FAX(052)936-4541
広島支社	〒 732-0052	広島市東区光町1丁目7番11号広島CDビル5階	TEL(082)261-7246	FAX(082)261-5400
九州支社	〒 810-0022	福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階	TEL(092)725-6677	FAX(092)725-6680